

## 個人意識としての気に入っている風景と集団意識としての地域らしい風景の関係

Relations between “Favorite Landscape” as an Individual Consciousness and “Districted Identifying Landscape” as a Group Consciousness

四戸 秀和\* 上田 裕文\*\*

Hidekazu SHINOHE Hirofumi UEDA

**Abstract:** The purpose of this study is to clarify the recognition of “Favorite landscape” in individual consciousness and “Districted identifying landscape” in group consciousness by focusing on the residence experience at city scale. In this article, Asahikawa city in Hokkaido prefecture was selected as object of the study. And some college students with residence history were asked to sketch or answer questions about “Favorite landscape”, “Districted identifying landscape” and “The number of residence years in Asahikawa city”. Irrelevant to residence year, it came to a result that, legible landscapes with certain form features are tend to be recognized readily as a collective cognition. Moreover, it is suggested that the collective cognition of those legible landscapes could be enhanced by accumulated knowledge and understanding of the region as the growing of residence year.

**Keywords:** individual consciousness, group consciousness, favorite landscape, districted identifying landscape, districted identifying landscape, residence year

**キーワード:** 個人意識, 集団意識,気に入っている風景, 地域らしい風景, 居住経験

### 1. はじめに

我が国の多くの地域では、都市化の過程で故郷の喪失が問題視されてきた<sup>1)</sup>。故郷の喪失とは、均質的空間が増加することで地域らしさとして共有される空間が減少し、住民がその土地とのつながりを持ってなくなることである<sup>2)</sup>。また、近年では、地域内における住民同士のコミュニティのあり方や、まちづくりにおける合意形成についての問題点も数多く指摘されている<sup>3)</sup>。そうした中、都市や地域を対象とした計画学における風景は、風景そのものを目的とするのではなく、住民と地域の結びつきである土地への帰属意識、又は住民と住民とを結びつける集団意識形成の手段として考えられるようになってきた<sup>4)</sup>。今後の都市、地域計画においては、ある場所に対する帰属意識（個人意識）をある集団に共有される地域らしさ（集団意識）に結びつけることが重要な課題であると言える。

個人意識に着目した研究は、周辺環境が及ぼす個人の行為や意識への影響に関するもの<sup>5)6)</sup>、原風景に関するもの<sup>7)</sup>などがある。しかし、個人の経験から考察し、集団意識との関係を扱ったものはあまりみられない。一方、集団意識に関するもの、特に地域らしさに着目すると、地域らしさの評価に関するもの<sup>8)</sup>、地域らしさにおける地元住民と移入住民での認識の差異に関するもの<sup>9)</sup>、地域らしさと住民の居住地域・生活文化との関係に関するもの<sup>10)</sup>などがある。ただし、地域らしさと個人意識の両者を扱ったものはあまりみられない。

そこで本研究では、ある地域における個人意識としての「気に入っている場所、風景」と、集団意識としての「地域らしい場所、風景」の認識のされ方の特徴を、居住年数や通学歴などの居住経験を指標として明らかにすることを目的とした（図-1）。これは、個人意識が集団意識化されるプロセスの一端を解明するためであり、都市のスケールにおける集団のつながりを生み出す地域計画への応用が期待される。

### 2. 方法

#### (1) 調査地と対象者

調査地は旭川市に選定した。本研究はまちづくりにおいて住民の合意形成が課題であると考えられる都市のスケールを対象とした。また、中でも今後縮小し都市間競争に追い込まれる地方都市であること、道北の核として重要な中核市であること、他の都市への応用しやすさを人口規模の面等で考慮し、選定した。調査は、同市に居住経験のある19～26歳の大学生・社会人73名を対象とし、居住経験を指標として分析考察を行うため、被験者の居住年数や通学歴を偏りなく分散させるよう考慮した（表-1）。また、吉村によれば原風景は主に幼少期（又は青年期）に形成され、それが対象化されることによって生成されるため<sup>7)</sup>、青年期以降は形成-生成プロセスが繰り返され複雑化することが予想される。そのため、幼少期～青年期に体験したことを純粋に振り返り回答できる若年層を対象とした。

#### (2) 調査方法

調査は、個人又は集団に対してアンケート用紙を配布し、記述してもらった。質問項目は、「1.気に入っている場所や風景」、「2.旭川らしい場所や風景」、「3.市内での居住年数」、「4.通学歴」を主要なものとして設けた（以下、質問1,2,3,4）。質問1,2に関しては、文章またはスケッチで回答するよう依頼し、回答される対象によって差が見られることを期待した。質問1に

質問1「気に入っている場所、風景」→質問2「地域らしい場所、風景」

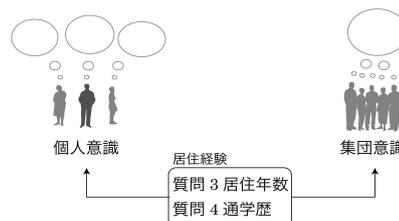


図-1 研究概念

\*東京大学大学院農学生命科学研究科 \*\*札幌市立大学デザイン学部

表-1 被験者数と居住年数

	旭川出身者	市外出身者	計
a (旭川市にのみ居住)	25	0	25
b (9年以上旭川市に居住)	15	10	25
c (0~8年間居住)	0	23	23
計	40	33	73

関しては、回答理由も併せて記述してもらった。質問3,4に関しては、個人意識、集団意識に関する両研究において個人の居住経験を考慮した例は少ないことから、居住経験としての質問を設けた。回答は自由記述とした。

(3) 分析方法

質問1, 2に対する回答を、場所として4つ(【学校】・【生活】・【遊び-商業】・【遊び-自然】)、眺めの景観として2つ(【展望景】・【道から景】)、認識している事柄として1つ(【知識】)、上記以外を【その他】として分類した(表-2)。これらのカテゴリの回答人数を比較する際に、質問1から質問2にかけての増減に着目し考察した。また、被験者を居住年数別にaグループ(旭川市にのみ居住)、bグループ(9~年齢未満年間居住)、cグループ(0~8年間居住)の3つに分類し、カテゴリごとの回答人数の傾向をみた。

3. 結果

(1) 各質問項目の結果とその傾向

1) 「質問1: 気に入っている場所、風景」に対する回答

特定のカテゴリへの偏りはあまり見られないが、【遊び-自然】、【道から景】、【遊び-商業】、【展望景】が比較的多く回答される傾向があった(図-2)。

【遊び-自然】は、26人(36%)に回答された。具体的な回答として、「河川公園」16人(62%)、「総合公園」9人(35%)、「住区基幹公園」7人(27%)などが多く、小さい頃によく遊んだ経験を伴う回答が多かった。【道から景】は、22人(30%)に回答された。具体的な回答として、「道路景」9人(41%)、「河川景」8人(36%)、「山景」6人(27%)が多く、小さい頃の経験を伴った印象的な眺めとして認識されていた。【遊び-商業】は、20人(27%)に回答された。具体的な回答として、「買物公園」9人(45%)

表-2 カテゴリの分類と回答例

カテゴリ	分類基準	回答例
【遊び-自然】	主に屋外で遊ぶ	住区基幹公園、総合公園、河川公園、その他公園
【道から景】	移動中に道路から見える	河川景、道路景、山景、その他
【遊び-商業】	商業施設で遊ぶ	動物園、買物公園、娯楽系、飲食系、博物館など
【展望景】	市街地を展望する	展望景、夜景
【生活】	日常生活で利用する	自宅、スーパー、駅、空港
【学校】	ほぼ毎日通う(部活動含む)	学校、運動施設(花咲公園等部活動で利用する場合)
【知識】	特徴として認識していること	河川系、食べ物、自然、イベント(祭り)など
【その他】	上記以外	ジム、ナナカマドなど

「娯楽施設」9人(45%)、「動物園」5人(25%)、「博物館」4人(20%)が多かった。【展望景】は、17人(23%)に回答された。主な回答は嵐山からの「展望所景」16人(94%)で、印象的な経験として回答されていた。【生活】・【学校】はそれぞれ、12人(16%)・11人(15%)に回答され、居住年数は長く、義務教育期間に市内に住んでいた人が多かった。【学校】に関しては小さい頃に繰り返し経験した馴染みのある場所として回答されていた。【知識】は、ほとんど回答されなかった。

2) 「質問2: 旭川らしい場所、風景」に対する回答

質問1に対する回答に比べ、【遊び-商業】、【道から景】、【知識】などの特定のカテゴリに回答が集中する傾向があった(図-3)。

【遊び-商業】は、質問1の20人から倍以上の56人(77%)に回答者が増加した。具体的な回答は「旭山動物園」44人(79%)、「飲食店」19人(34%)、「買物公園」17人(30%)などであった。【道から景】の回答者は、質問1の22人から40人(55%)に増加した。また、市内の大学へ通う人(93%)が多かった。具体的な回答は、「河川景」33人(83%)、「道路景」10人(25%)などであった。【知識】の回答者は、質問1の5人から30人(41%)へと増加した。具体的な回答は、「食べ物(ラーメン)」12人(40%)、「河川」11人(37%)などであった。【遊び-自然】の回答者は、質問1の26人から11人(15%)に減少した。具体的な回答は、「総合公園」5人(45%)、「河川公園」5人(45%)、「住区基幹公園」3人(27%)であった。【展望景】の回答者は、質問1の17人から2人(3%)に減少した。【学校】の回答者は、質問1の11人から5人(7%)に減少、【生活】の回答者も、質問1の12人から4人(5%)に減少した。

カテゴリ	回答人数 (人)	具体的回答例 (人 (%))	通学歴 ※1				居住年数 ※2		
			小	中	高	大	a	b	c
【遊び-自然】	26	「河川公園」16(62%)、「総合公園」9(35%)、「住区基幹公園」7(27%)	77%	69%	77%	77%	31%	50%	19%
【道から景】	22	「道路景」9(41%)、「河川景」8(36%)、「山景」6(27%)	64%	68%	68%	73%	47%	41%	12%
【遊び-商業】	20	「買物公園」9(45%)、「娯楽施設」9(45%)、「動物園」5(25%)	60%	65%	70%	90%	40%	25%	35%
【展望景】	17	「その他展望景」13(76%)、「夜景」4(24%)	76%	82%	82%	94%	47%	41%	12%
【生活利用】	12	「自宅」11(92%)、「駅、空港」2(17%)	92%	83%	92%	83%	50%	42%	8%
【学校】	11	「運動施設(部活動)」5(45%)、「高校」4(36%)、「その他学校」2(18%)	82%	82%	91%	82%	27%	55%	18%
【知識】	5	「祭り」3(60%)、「自然が豊か」2(40%)、「食べ物」1(20%)	60%	60%	80%	60%	27%	50%	23%
【その他】	6	「ジム」1(17%)、「ナナカマド」1(17%)、「末広地区」1(17%)	83%	83%	83%	67%	20%	80%	0%

※1 小:小学校,中:中学校,高:高校,大:大学 ※2 表-2参照 ※3 全体平均年齢21歳,全体平均居住年14年 ※4 具体的回答例は、上位3つを記載

図-2 質問1「気に入っている場所、風景」の回答結果

カテゴリ	回答人数 (人)	具体的回答例 (人 (%))	通学歴 ※1				居住年数 ※2		
			小	中	高	大	a	b	c
【遊び-自然】	11	「総合公園」5(45%)、「河川公園」5(45%)、「住区基幹公園」3(27%)	73%	64%	73%	73%	36%	36%	27%
【道から景】	40	「河川景」33(83%)、「道路景」10(25%)、「山景」5(13%)	73%	70%	80%	93%	43%	33%	25%
【遊び-商業】	56	「動物園」44(79%)、「飲食店」19(34%)、「買物公園」17(30%)	65%	61%	70%	86%	34%	34%	34%
【展望景】	2	「夜景」1(50%)、「その他展望景」1(50%)	50%	50%	50%	100%	50%	0%	50%
【生活利用】	4	「駅」4(100%)、「自衛隊」2(50%)	50%	75%	75%	100%	25%	50%	25%
【学校】	5	「運動施設(部活動)」3(60%)、「大学」2(34%)	40%	40%	60%	100%	20%	20%	60%
【知識】	30	「食べ物」12(40%)、「河川」11(37%)、「自然」5(17%)	67%	70%	77%	80%	40%	33%	27%
【その他】	2	「雪の結晶」1(50%)、「人口多く感じない」1(50%)	50%	50%	100%	100%	50%	0%	50%

※1 小:小学校,中:中学校,高:高校,大:大学 ※2 表-2参照 ※3 全体平均年齢21歳,全体平均居住年14年 ※4 具体的回答例は、上位3つを記載

図-3 質問2「旭川らしい場所、風景」の回答結果

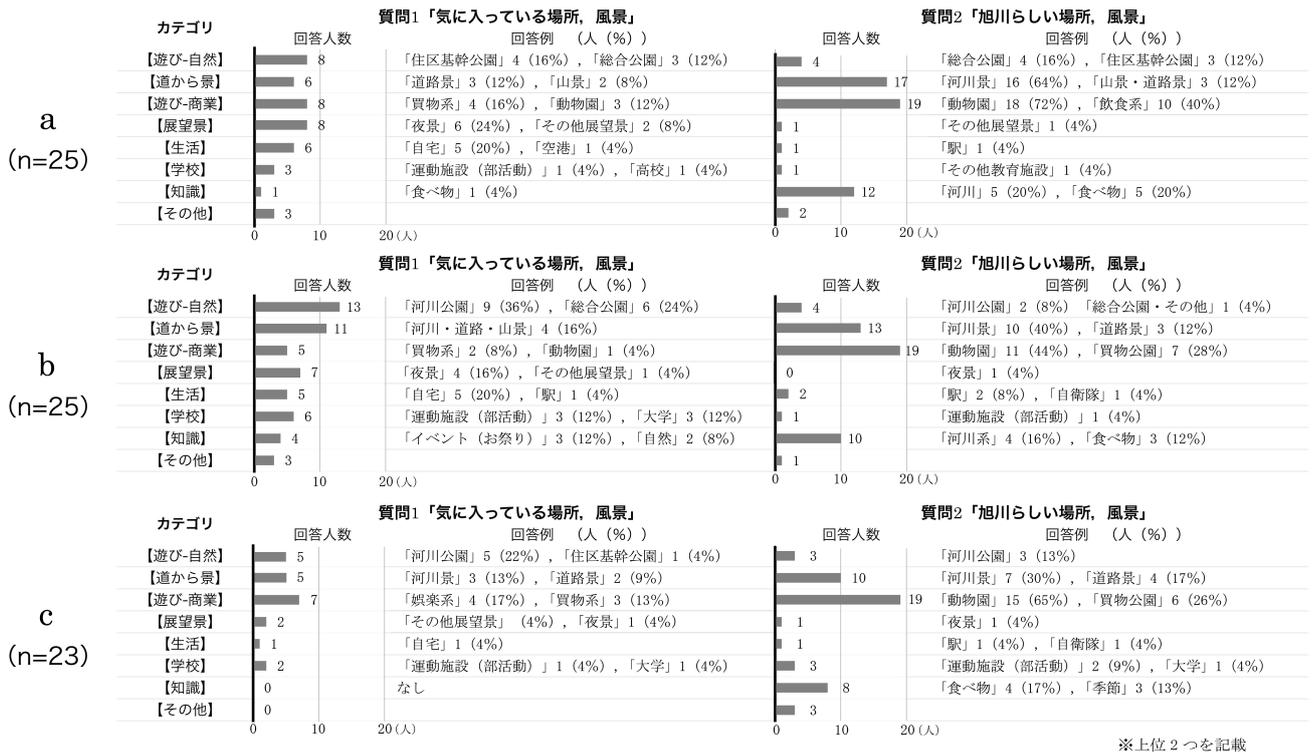


図-4 居住年数別グループでの比較

## (2) 居住年数別に見る回答結果とその傾向

質問1では、bグループの解答数が多く、また【遊び-自然】・【道から景】が13人(52%)・11人(44%)と他のグループに比べ比較的多く回答された。cグループは、他のグループに比べて回答数が少なく、全体的に回答数の多い認知度の高い場所や風景が回答される傾向があった。aグループは、cグループに比べて回答数が多く、回答カテゴリーが比較的広く分布した。

一方、質問2においては、a, b, c全グループで【道から景】・【遊び-商業】・【知識】に回答が集中する傾向があった。具体的には「河川景」がaグループ16人(64%)、bグループ10人(40%)、cグループ7人(30%)、「動物園」がaグループ18人(72%)、bグループ11人(44%)、cグループ15人(65%)であった。グループ間で比較をすると、cグループ→bグループ→aグループの順に、つまり居住年数の長いグループになるにしたがって【道から景】・【知識】(具体的には「河川」・「河川系」)の回答が増加する傾向がみられた。

更に、カテゴリーを超えてこの「河川」に注目すると、質問1では居住年数が比較的少ないb・cグループの「河川公園」や「河川」の回答が多い一方で、質問2ではaグループ、bグループ、cグループの順に「河川景」の回答が多かった。居住年数の多いaグループでは「河川公園」の回答はほとんどみられなかった。

## 4. 考察

### (1) 「自分の場所」から「地域らしさ」へ

質問1から質問2にかけて減少したカテゴリーと増加したカテゴリーに分類し考察した(以下、減カテゴリー・増カテゴリー)。減カテゴリーは個人意識としての認識が強いものであり、増カテゴリーは集団意識化された対象であると捉えることができる。

減カテゴリーの【学校】、【生活】、【遊び-自然】で多く回答された「学校」、「スーパー」、「住区基幹公園」などは、日常的な空間であるが、物理的に地域の特徴を表象していることは少なく、何かきっかけを与えない限り、地域らしさとして意識化されないものと考えられる<sup>7)</sup>。レルフの指摘するような、都市活動の単なる

背景として存在する均質的な空間でしかないと言える<sup>2)</sup>。一方、地域らしさを表象する可能性のある「総合公園」、「駅」、「空港」があまり回答されないのは、市民の利用機会の少なさによるものと考えられる。

これに対し、質問1の17人から質問2の2人に減少した、減カテゴリーの【展望景】はほとんどの人にとって非日常的な景観体験であり、今までに経験したことのない印象的な眺めとして回答されていた。高所から地域全体を展望するという行為は古くから特別な行為とされ<sup>11)</sup>、また、居住経験の長い人にとっては印象的である以上に感情移入を伴うような景観体験であると考えられる。それでも集団意識化されにくいのは、後述する通り、教育・メディアなどが介入していないためであると考えられる。

質問1の20人から質問2の56人に増加した、増カテゴリーの【遊び-商業】において、「旭山動物園」、「買物公園」、「ラーメン屋」が、居住年数に関わらず多くの人に回答されていた。ただし、速水が指摘するように、「旭山動物園」も「ラーメン屋」も戦後の観光ブームの時代につくられた観光資源であり、市民に共有された国語によって集団意識化されたものである<sup>12)</sup>。したがって、地域固有の特徴であるとは言い切れないが、多くの人に地域らしさとして認識されるその仕掛けは、本来の地域らしさとしてある資源に応用すべき手法である。

質問1の22人から質問2の40人に増加した増カテゴリーの【道から景】の主な回答は日常的に目にする機会の多い「河川景」、「道路景」、「山景」であった。日常的な場所である【学校】、【生活】、【遊び-自然】との違いは、地域らしさとしての特徴の有無である。例えば、河川においては、市内に168の川と760の橋があり、旭川市の地形的特徴を表す存在である<sup>13)</sup>。これらが集団意識として多くの人に認識されるのは、河川空間が日常的な生活空間に多く存在することに加え、その多様な利用によって関わる頻度を更にあげていること、教育などで取り上げられること等が考えられる。また、【道から景】が他のカテゴリーに比べてスケッチでの回答が多いのは、絵として描きやすい形体的特徴のある景観が地域らしさ(集団意識)に結びつきやすい結果であると言える。

表-3 スケッチでの回答結果

スケッチ	【遊び-自然】	【道から景】	【遊び-商業】	【展望景】	【生活】	【学校】
質問1	1 (3.8%)	14 (61.6%)	5 (25.0%)	1 (6.3%)	0 (0.0%)	1 (9.1%)
質問2	3 (27.3%)	25 (62.5%)	7 (12.5%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	1 (20.0%)

※括弧内の割合は (カテゴリスケッチ回答数/カテゴリ回答数)

増カテゴリの【知識】が、質問1で5人だったのが、質問2で30人と回答者数が大幅に増加しているのは、「気に入っている場所、風景」(個人意識)が具体的な経験から考えられるのに対し、「地域らしい場所、風景」(集団意識)が抽象的なイメージから想起されるものであることを示唆するものである。木岡は、個人意識が地域に共有される集団意識にまでに昇華するには「語り」の力が必要であるとしている<sup>14)</sup>。学校教育や博物館等の文化施設などは、「語り」としての抽象概念を提供し、集団意識形成に寄与していると考えられる。例えば、学校での社会科の授業や、「川のおもしろ館」と呼ばれる博物館があるが、【道から景】において「河川景」が多く回答されるのも、これらの影響が考えられる。教育や博物館は、土地への帰属意識であるトポフィリアが科学的な好奇心と結びついた時に豊かになると言われていることから重要であるだろう<sup>15)</sup>。

## (2) 居住経験による影響

質問1において、bグループ全体の回答数が多く、【遊び-自然】・【道から景】の回答(例えば「総合公園」・「河川」)が多かったのは、他の地域に居住することによって対象化された小さい頃の思い出の場所や旭川市の特徴が他のグループの人よりも印象的に認識されている結果であると考えられる。居住年数の少ないcグループで認知度の高い場所や風景に回答が偏る傾向がみられたのは、地域を対象化して試みるのが可能であっても、経験が浅いために想起される場所や風景が近況の出来事を挙げるケースが多くなるためだと考えられる。一方、居住年数が多いaグループがcグループに比べて回答者数の増加・回答カテゴリの多様性がみられたのは、場所の認識が多様化した結果だと考えられる。居住年数が多いにも関わらず、日常的に目にする河川が回答されていないのは、地域の特徴を対象化することができていないためであると考えられる。

質問2において、【遊び-商業】(主に「動物園」)がグループ間での回答数で差がみられないのは、集団意識が居住年数による影響を受けにくい結果であると考えられる。ただし、【道から景】・【知識】の回答が若干増加する傾向があったことから、旭川市の教育機関や生活の中で得られる「石狩川」や「大雪山」などに対する知識が量的に増えること、具体的には居住年数の増加にしたがって学校や博物館、日常生活などで得られる地域の抽象的言語的イメージの量が増えることが、地域らしさの認識に少なからず影響を与えることも示唆された。

以上より、個人意識として強く意識されるものは、居住経験に影響を受けることが確認された。一方で、「地域らしさ」としての集団意識は、居住経験に影響を受けにくい認知度の高い空間であることや言語的抽象的なイメージに大きく影響を受けていることが確認された。【道から景】に関しては、居住年数と【知識】が比例して増加することによって、その認識が強化されることが示唆された。

## 5. 結論

本研究は、地域住民における個人意識としての「気に入っている場所、風景」と集団意識としての「地域らしい場所、風景」との関係性を、居住経験に着目して明らかにすることを目的とした。

結果として、旭川の地域らしさとしての【道から景】がスケッチで多く描かれ、居住年数にかかわらず多くの人に回答されていることから、形体的特徴のあるわかりやすい景観が集団意識とし

て認識されやすいということになった。また、このようなわかりやすい景観の集団意識化は、居住年数の増加と【知識】カテゴリの回答の増加と比例していることから、居住することによって蓄積される地域に関する知識や理解によって強化されることが示唆された。

一般的には、ランドマークが集団意識化の景観要素として認識されがちではあるが、絵に描きやすく分かりやすい景観、例えば都市のエッジとしての河川やバスとしての並木道等がその機能を有するということが今回の研究によって示唆された。陣内は都市の変わらぬ骨格として地形や道路の骨格などを上げているが<sup>16)</sup>、このような長年変わらない都市の構造を集団意識(地域らしさ)に昇華させることで、住民同士をつなげることや住民と都市を繋ぐことを可能にすると考えられる。このような風景を共有することで、都市住民が本質的な居心地の良さを実感し、都市の魅力へとつながっていくのではないだろうか。

今回は個人意識と集団意識の認識のされ方の特徴から、集団意識化のひとつのパターンを明らかにし、居住年数にしたがって増加する地域に対する知識や理解が地域らしさの認識プロセスに影響を与えることが示唆されたが、この検証については今後の研究課題としたい。手法に関する課題は、十分なサンプル数の確保と更なる考察が可能な質的データを得ることがあげられる。例えば、スケッチでの回答に対して上田が景観要素とその構成等から風景という現象を考察しているように<sup>17)</sup>、回答者数の集計にとどまらない考察を行っていく必要がある。以上の点をふまえ、今後の計画論の発展につながる研究を期待したい。

## 補注及び参考文献

- 1) 成田龍一ほか(2000)：故郷の喪失と再生：青弓社、105-114
- 2) エドワード・レルフ(1991)：場所の現象学：筑摩書房、101-110
- 3) 桑子敏雄ほか(2002)：環境と国土の価値構造：東信堂
- 4) 中井祐ほか(2012)：風景の思想：学芸出版社、199-200
- 5) 高山範理・喜多明・香川隆英(2007)：生活域の自然環境が身近な森林に対するふれあい活動、管理活動に与える影響：ランドスケープ研究70(5)、585-590
- 6) 長友大幸・下村孝(2010)：校庭に残存する巨樹への接近頻度と環境教育受講経験が児童の意識に及ぼす影響：ランドスケープ研究73(5)、741-746
- 7) 吉村晶子(2004)：原風景に関する研究：ランドスケープ研究67(5)、731-736
- 8) 奥敬一・深町加津枝(2005)：嵐山の森林景観における地域らしさの評価構造：ランドスケープ研究68(5)、747-752
- 9) 松島洋介・奥敬一・深町加津枝・堀内美緒・森本幸裕(2008)：琵琶湖西岸の里山地域における地元住民と移入住民の景観認識の比較：ランドスケープ研究71(5)、741-746
- 10) 上田裕文(2006)：日独の森林イメージに関する比較研究：ランドスケープ研究69(5)、691-693
- 11) 加藤政洋ほか(2006)：都市空間の地理学：ミネルヴァ書房、77-80
- 12) 速水健朗(2011)：ラーメンと愛国：講談社、136-182
- 13) 「橋梁数に関する資料」・「河川数に関する資料」：旭川市公式ホームページ、土木管理課、道路管理係、各種資料  
<<http://www.city.asahikawa.hokkaido.jp>>、2012.4.1更新、2012.9.20参照
- 14) 木岡伸夫ほか(2002)：風景の哲学：ナカニシヤ出版、51-54
- 15) イーパー・トゥアン(1992)：トポフィリア-人間と環境-：せりか書房、236pp
- 16) 陣内秀信(1992)：東京の空間人類学：ちくま学芸文庫、19-24
- 17) 上田裕文(2009)：風景イメージスケッチ手法の構築に関する研究：都市計画論文集44、37-42